

日本に於ける中国文学史編纂の歴史

～ I 明治期 ～

井 上 泰 山

History of the Compilation of Chinese Literary History in Japan

— 1. Meiji Period —

INOUE Taizan

Japanese people showed interest in Chinese literature, which has been around for about 3,000 years in recorded history, at an early stage. They compiled and published many books on the history of Chinese literature between the late 19th century and early 21st century. The compilation of Chinese literary history in Japan, however, did not happen as a result of imitating the compilation custom in China or being motivated by China. Japan started the compilation process in its original manner long before China did, and China eventually looked to the Japanese compilation works as a model. Given this fact, this paper discusses how the Japanese people in the Meiji period approached Chinese literary history when describing it, how familiar they were especially with the type of Chinese literature written in colloquial language, and how their approach and knowledge influenced the way they compiled and described the Chinese literary history. A list of texts on Chinese literary history compiled in Japan can be found at the end of the paper.

一 はじめに

有史以来、日本は、中国の豊かな精神文化を取り込み、自国の文化を築き上げる重要な養分としてきた。日本にとって、学術・芸術のあらゆる分野において、中国の影響力は甚大であったといっても過言ではない。そして、このことは、文学の分野についてもあてはまる。日本の文学は、古来、中国文学の影響を深く受けており、その淵源を具体的に検証することが困難なものについても、突き詰めていけば、結局のところ、その根源を中国の文化に求めることができるものも少なくない。周知の如く、中国の文学は世界的にも類を見ないほど長い歴史を有していると同時に、時代とともに様々なジャンルを生み出して、人間の認識を絶えず前進させ、拡大させてきた。漢字という共通の文化基盤を有する日本は、古来、時代によって程度の差はあるものの、そうした中国の文学の動向に多大なる関心を寄せ、様々に注意を払ってきた。つまり、文学の分野においても、日本は常に中国文化の甚大な影響下に置かれてきたのである。

しかし、文学自体の進展についてはともかく、こと文学の歴史を体系的に記述するという点については、事情は些か異なっている。日本に於ける中国文学史編纂の歴史は、単に中国のそれを模倣したり、養分として全面的に吸収したりした結果生まれたものではない。すでに広く認められている事実ではあるが、こと中国文学史の編纂に関する限り、日本は中国に先駆けてその編纂作業に着手し、中国が逆にそれを一つの模範として編纂作業を開始した。自国の文学であるにもかかわらず、その歴史を体系化する作業が隣国日本によって先鞭をつけられ、その刺激を受けてようやく本腰をあげるという、こうした逆転現象が何故起きたか、という問題については、今後様々な側面からの検証が必要になるものと思われる。その背景としてただちに思い浮かぶのは、両国の置かれた政治的・社会的状況の相違や、経済的な事情などであるが、しかし、残念ながら、本稿ではその問題に深く立ち入る余裕はない。それについては、別途稿を起すことにして、ここでは先ず、以上の認識に立って、中国文学史の記述に関して、明治期の日本人がどのような態度で臨んだか、とくに、当時の日本人が白話文学に対してどの程度認識を深めていたか、そして、そのことが、編纂方法ないしは記述のあり方にかなる影響を及ぼしたか、といった点を中心に検証することを企図したものである。また、そうした作業を通じて、従来の日本に於ける中国文学史編纂の方針、およびその問題点といったことについても、些か私見を述べてみたい。

二 日本人による中国文学史編纂の歴史

中国文学史の編纂に対して、日本人は早くから関心を寄せ、19世紀の末から21世紀の初頭に

かけて多くの中国文学史の専著が出版された。資料として、本論の末尾に、日本で編纂された中国文学史の一覧表を付した。この一覧表は、筆者が独自に作成したものではなく、京都大学教授・川合康三氏が2002年に編纂した『中国の文学史観』（創文社）という書物の巻末に付載されている「資料篇」に基づいて一覧表を作成し、その後、私自身が数点を補ったものである。この『中国の文学史観』という書物は、日本および中国に於ける中国文学史に関する過去の取り組みをさまざまな角度から捉え直し、従来の文学史の編纂方法を確認するとともに、その問題点を指摘したものであり、日本で刊行された中国文学史に関する詳しい「資料」とともに、川合康三・乾源俊・浅見洋二・蔣寅・和田英信・竹村則行・西上勝・陳国球・戴燕各氏による、文学史に関する個別のテーマについての論文も掲載されている。後に引用する川合康三教授の問題提起は言うまでもなく、いくつかの論文については、本稿を草するにあたって大いに参考にさせていただいた。この場をお借りして、川合教授をはじめ、同書の執筆者の方々に対し、感謝申し上げたい。

ところで、既述の一覧表は、1882年から1997年までの115年間に、日本に於いて出版された「中国文学史」あるいは「中国文学史概説」の書物を時代順に列挙したものである。量的に見ると、全部で61点にのぼる。全体的に眺めて見ると、日本に於いて「中国文学史」と名の付く書物が最初に出版されたのは1882年のことであった。また、時代別に見てみると、明治時代に出版されたものが21点、大正時代のもものが5点、昭和に入ると、第二次世界大戦以前のもものが12点、戦後のものが20点、平成に入って3点、ということになる。ただ、以上の数字は、再版されたものも1点として計算し、さらに、上下巻に分けて出版されたものも、別々の書物として刊行されている場合には2点として数えた上での数字であるので、実際に刊行された種類としては、もう少し少ない数字になるが、それでも、50種類以上の中国文学史が刊行されていることを考えると、決して少ない数字ではないように思われる。こうした現象一つをとっても、日本人が中国文学の歴史に対して、早くから一貫して高い関心を寄せてきたことが窺えるであろう。

三 明治期に編纂された中国文学史の特色

(一) 兒島献吉郎の『支那文学史』

日本人によって編纂された中国文学史の種類とその書名等については一覧表に示した通りであるが、では、明治時代の中国文学史にはどのような特色が認められるか、また、実際にどのような方針に基づいて編纂されたのか。こうした点について、いくつかの具体例を挙げながら検討してみることにする。

初期の中国文学史の特徴として先ず言えることは、書名に「文学史」という名前を冠してはいるものの、実際には通史ではなく、その多くが、古代だけに絞って記述されていることである。しかも、文学自身の定義も曖昧で、中には歴史書や経書までも一括して「文学」の分野に取り込んでいるものもある。現在のように学問が細分化されていない時代にあっては、文学は思想や哲学をも広く包括し得る、いわゆる「学問」にも相当する概念であったと考えられるが、文学史の編纂にもそのことが現れている。一覧表の最初にある、末松謙澄の『支那古文学略史』は、その名の通り、古代の文献、主として諸子百家の書物を解説したもので、他に「呂氏春秋」や「左伝」「国語」など、歴史や思想に係わる書物を加えて、それに解説を施したものである。また、2番目と3番目に掲げた兒島献吉郎の『支那文学史』や『文学小史』の記述も、春秋戦国時代までに限られており、通史と言えるものではない。ただし、幸福香織氏の解説によれば、兒島献吉郎は清代までの通史を書く構想だけもっていたようであるが、何らかの事情によって未完に終わってしまったものと思われる。

(二) 藤田豊八の『支那文学史』

次に藤田豊八の『支那文学史』。これについても、その記述の範囲が古代に止まっていることは、兒島献吉郎の場合と同じであるが、記述の方法として、中国の文学を地域によって二分し、「南方文学」と「北方文学」に分類し、さらに、「思想内容」と「芸術形式」の二つの柱を立てて記述するなど、その後の多くの文学史の模範になったという点からも影響力の多きを窺い知ることができる。また、「東漢文学」の一節に「小説の萌芽」という項目が設けられ、文言による神仙小説や随筆なども記述の対象に加えていることは、注目すべき点であると思われる。

(三) 古城貞吉の『支那文学史 完』

日本に於いて真の意味で中国文学通史の名に値する成果が最初に公にされたのは、1897年（明治30年）、中国の年号で言えば、清の光緒23年のことであった。一覧表の6番目に記載されている、古城貞吉の『支那文学史 完』がそれにあたる。

既述の『中国の文学史観』に収録されている浅見洋二氏の解説によれば、著者の古城貞吉は1866年に九州の熊本県に生まれ、独学で中国文学や経学を修めた人物で、新聞社に勤務した後、大学の講師となり、現在の拓殖大学および大東文化大学の前身である東洋協会殖民専門学校や大東文化学院などで教鞭を執り、後に東洋大学の教授を務めたとのことである。生年から起算すると、『支那文学史 完』を完成させたのは、弱冠31歳の時であったことがわかる。

既に述べたように、この書物の最大の特徴は、中国の文学について、古代から清代まで通史

的に記述したところにあり、著者が「凡例」に書き記しているところによれば、同類の書物が中国にも出現していないことを考慮して、明治24年（1891）の秋から執筆を開始し、その後、著者が清国に遊学した1年間余りの中断を経て、6年後の1897年にようやく刊行したものだとのことである。

同じく「凡例」の中で、著者は、この書物に対して一応「文学史」という名前を付けたものの、本当の意味でその名に値するかどうか不安であるが、ただ、多くの人名を列挙して多くの文例を示したことが該書の功績である、といった主旨の言葉を添えている。多少は謙遜に係る言辞とはいえ、中国文学史の通史的な記述にあたって、その方法が妥当であるか否かについて、一定の問題意識をもっていただことが確認でき、この点は、最初期の著作としては、大いに評価できる点であると考えられる。

記述の体裁としては、全体を王朝ごとに九篇に分け、第一篇の「支那文学の起源」から説き起こし、以下第九篇までの篇目を、それぞれ「諸子時代」「漢代の文学」「六朝の文学」「唐朝の文学」「宋朝の文学」「金元間の文学」「明代の文学」「清朝の文学」とし、各王朝の文学について、主として詩と散文とに分類して実例を示した上で解説するという方式をとっている。作品の原文には訓点も施してあり、読者のための便宜が図られている。古城貞吉の『支那文学史完』は刊行後約10年間にわたって何度も版を重ねており、当時の人々から広く歓迎されたことがわかる。

また、初版本と再版本との最も大きな違いは、再版本に「余論」が新たに加えられたことで、その細目は、「古代文字の説」「篆隸の変遷」「造字の基礎」「文字と学術との関係」「儒教主義の発展」「陋儒と立言」「儒教主義と小説との関係」「元曲の発達」「士君子の小説観」などである。ここで注目すべき点は、初版本にはまったく見られなかった、小説や戯曲に関する解説が新たに追加されていることで、作品として『西廂記』『水滸伝』『琵琶記』『牡丹亭』『紅樓夢』『桃花扇』などの名前が挙げられ、白話文学関係の用語として、「院本」「白話小説」「明人の伝奇」「元代伝奇」「元代戯曲」「雜劇」などの用語が登場している。残念ながら、その記述内容はきわめて簡単なもので、具体的な例文さえも挙げられていないが、初版本には無かった「白話文学」を記載内容に加えてきたことは、当時とすれば特筆するに値する画期的な変化であったと考えられる。もっとも、初版本の中に白話文学に関する記述がまったく見られないことについても、三浦叶氏の「明治年間における支那文学史の研究」（1967年、『斯文』所収）の考証によれば、著者が意図的にそれを省いたのではなく、その重要性は重々認識しながらも、たとえば元曲など、その難解さ故に解説することができなかつたのであると言われている。当時の日本人にとって、元代の戯曲の台本は、文言による詩詞に加えて、多くの白話が盛り込まれているために、

経書や歴史書と比較すると格段に難解な書物であったことは容易に想像されることであり、三浦氏の説もある程度的を射ているように思われる。それはともかく、以上のように、1897年に東京の経済雑誌社から刊行された古城貞吉の『支那文学史 完』は、日本と中国を通じて、史上初の中国文学通史の榮譽を担うことになった。

(四) 笹川種郎の『支那小説戯曲小史』と『支那文学史』

日本人が編纂した中国文学史の中で、いわゆる「白話文学」がいつ頃からどのように記述されていくかという点を考察の対象にするならば、古城貞吉に次いで、一覧表の8・9に掲げた、笹川種郎の名前を挙げないわけにはいかない。

笹川種郎は明治3年(1870年)に東京で生まれ、東京帝国大学国史科を卒業。その後、文筆活動に従事し、日本文化史に関する多くの書物を執筆して、昭和24年(1949年)に80歳で死去した。生前は泉鏡花や田岡嶺雲などとも親交があり、同人雑誌なども発行したようであるが、『支那小説戯曲小史』は彼が27歳の時、『支那文学史』は28歳の時に出版したもので、どちらも、非常に若い時期に執筆したものであることがわかる。このうち、『支那小説戯曲小史』の最大の特徴は、その書名が明確に示している通り、従来本格的に取り上げられることのなかった中国の小説や戯曲に点を絞ってその歴史を記述したことにある。

全体は4篇に分類され、第1篇で「支那に於ける小説戯曲の発達」について解説した後、第2篇を「元朝」、第3篇を「明朝」、第3篇を「清朝」とし、第2篇の「元朝」では、「概論」「雜劇」「水滸伝と三国志」「西廂記」「琵琶記」などについて解説し、第3篇の「明朝」では、「西遊記」と「湯若士」を、第3篇の「明朝」では、「紅樓夢」「金聖嘆」「李笠翁」「桃花扇」などについて解説している。唐代や宋代の白話文学について言及せず、いきなり元代の情況から説き始めていることについては、現代の目から見れば些か奇異な感じを受けるが、これは資料的な限界に起因するものと思われ、当時はまだ敦煌の文献なども発見されていなかったことを考慮すれば、元代から記述が始まるのは、やむを得ないことであつたと考えられる。ともあれ、この書物の刊行によって、中国文学の中には、従来知られていたような文言による作品以外に、口語を主体として書かれた文学作品も数多くあつたことが広く認識されるようになっていく。白話文学の存在を日本人に広く知らしめた点に於いて、本書は中国文学史編纂史上、特筆すべき、画期的な意義をもっていると言っても過言ではない。

続いて笹川は翌年の1898年に、富山房から『支那文学史』を出版した。前著『支那小説戯曲小史』の成果をも存分に採り入れて執筆された該書は、古代から清代までの文学について通史的に記述し、しかも、内容として、必要に応じて、白話文学作品も多数採り入れている点、文

字通り、日本に於いて、硬軟取り混ぜた、本格的な文学通史の誕生を見たことになる。すでに何度も触れた『中国の文学史観』に収録されている西上勝氏の解説によれば、「本書の叙述を支える見解は、儒教として結実する支那北方人種の築いた文明の、時に南方及び外来の文明に影響を受けながら現出した変遷消長が文学に投影されたものが中国の文学史だ、ということに集約される」とのことであるが、いずれにしても、従来文学史の中に現れることのなかった白話文学の作品を正面から採り入れ、文言文学と同等の地平に置いて叙述したことは、後続の文学史編纂に先鞭をつけた、まさに画期的な視点であったと言える。

この書物に対しては、当時の人々、とくに国民文学を擁護する立場の人物からは、とかく批判的な評価が下されることもあったようであるが、長い目で見れば、笹川の文学史編纂史上に於ける功績は決して小さくはないように思われる。中国近世戯曲研究の第一人者である青木正兒が、少年時代に笹川種郎の『支那文学史』の一節を読んで驚喜したことからも、当時の日本に於いて、この書物がいかに大きな影響を与えつつあったかが理解される。

四 中国文学史編纂上の問題点

以上述べたように、日本人による中国文学史編纂の試みは、明治期、1897年に至って一つの大きな区切りを迎え、古代から清代までの文学の情況を通史的に概観した文学史が出現した。内容的に見ても、それ以前の、経書や思想関係の作品を中心に記述したものは異なり、詩や散文などの文言文学の作品を取り上げるようになったことは言うまでもなく、元代以降新たに台頭してきた白話文学の作品についても、次第に詳しい解説が加えられるようになった。

こうした方針はその後も継続して受け継がれ、久保得二や宮原民平、あるいは塩谷温など、白話文学の研究に精魂を傾けた学者の出現によって、中国文学史の記述はますます豊富で詳細なものへと進化していく。その意味で、大正期から昭和期にかけて編纂された多くの中国文学史は、明治期に積み重ねられたさまざまな試行錯誤の中から生まれた、苦難の産物であると言っても過言ではないように思われる。

明治期に刊行された幾つかの中国文学史に対する如上の考察をふまえた上で、そこから浮かび上がってくる問題点についても少し触れておきたい。

言うまでもなく、過去に積み重ねられた遺産を未来に生かすことは、後学にとって当然の使命ではあるが、一方で、日本に於ける中国文学史編纂の過程を俯瞰してみると、そこには不安材料がないわけではない。それは、文学史の区分法に関して大きな問題をかかえているからである。明治期およびそれ以降に編纂された多くの中国文学史は、一様に、王朝の交替期を以てそれをそのまま文学史上の区切りとしている。「漢文唐詩宋詞元曲」といった言葉に代表される

ように、一代の王朝の変化が、そのまま文学の変化と連動しているかのような錯覚が、未だに横行しているのである。この点については、松本肇氏が「日本で刊行された文学史」の昭和戦後・平成篇「あとがき」（川合康三編『中国の文学史観』（創文社、2002）「資料篇」所収）の中で述べている次の言葉が、問題点を浮き彫りにしているように思われる。

現在、中国文学史の記述の方法を見ると、時代を区分して、作家と作品について解説するというのが、普通の形式となっている。だが、文学史が、作家の伝記と作品の解説だけでよいのかという疑問は、すでに明治時代から存在しているのである。また、中国文学には想像が欠如しているという見方なども、日清戦争を契機に図式化された見方のひとつなのだった。その意味では、波多野太郎氏のいう通り、「中国文学史の研究は明治大正期から前進していない」。既成の尺度で社会の現象をはかることが困難になった現在、文学史の方法にも新しい試みが必要なのではなかろうか。その兆しは、すでに見られる。「文学」という範囲をはみ出して、「文芸」という広い視点で文学史を構築する試みや、文学史から時代区分という枠組みそのものを取り払い、特定のキーワードによって文学の流れを展望する試みなどが、それに当たるだろう。文学史の可能性は、未来に向かって開かれているのである。

松本氏のこうした発言の背景としては、明治期以来夥しく刊行されてきた中国文学史が、その基本的な叙述の方針として、あくまでも時代別にジャンルを分けて記述する態度に終始し、文学それ自体の変化と進歩を促す新たな基軸を探しあてる努力を怠ってきたことに対する反省の意が隠されているように見受けられる。作者と作品の解説だけを時代順に並べることが、すなわち文学史の使命であるかのような感覚が、仮にも日本の文学研究者の心の片隅にあるとすれば、それは大いなる錯覚であり、早急に是正されなければならないものであろう。旧来の概念が大きく変動しつつある現在、文学史の編纂についても、旧態依然とした陳腐な基軸に頼ってはいは、新たな時代の要求に堪え得る文学史の編纂は不可能に近いと言える。この点について、川合康三氏の「今、なぜ文学史か」と題する以下の提言（川合康三編『中国の文学史観』創文社、2002）は、今後の文学史編纂に一石を投じる意義をもつ、重要な発言であるように思われる。

二十一世紀に入った現在、西欧近代の作り出した概念はあちこちで揺らぎだしている。文学史観も近代の文化全体の動きと連動して生まれたものであるならば、文化全体が大き

く変容しつつある今日では、そのまま通用するとは思われない。今日には今日の新たな文学史観が求められるだろう。或いはそもそも文学史というものの自体が今日成立可能であるか否か、存在意義があるかどうかについても、改めて考え直してみる必要があろう。十九世紀的な文学史、文学史観は変容せざるをえないとしても、或る種の文学史的思考は文学が存在する限り、伴わざるをえないと思われる。というのは、文学作品は創るにせよ享受するにせよ、その時点までの文学を除外しては成立しないものなのだから。作品は通時的な軸と共時的な軸とが交わる点に、さらに作者の個性という要素がからむ三次元的空間に生まれるものであることは、今後も変わることはないだろう。それゆえ、作品の成立そのものに文学史的な要素は欠くことができないだろう。それを文学史と呼ぶならば、文学史は文学作品の内部に本質的に懐抱されていることになる。それが今ふつうに考えられている文学史とはまったく異なるものであるにしても。

近代の歴史学は歴史の事実性を自明なもののごとく扱ってきたが、それに対しても今日では懐疑を抱かれている。歴史のなかの事実は客観的な、疑いえないものであるとした信念が揺らぎ、史実もまた人が「創り出した」ものではないかという考えに代わりつつある。文学史も歴史の他の分野と同じく、あたかも動かしえない事実であるかのように記述されてきたのであるが、それは歴史事実を不変の事実であるかのように信じこむ時代のなかで機能していたにすぎなかった。文学史もやはりそれぞれの時代によって創り出されたものなのである。

このように文学史はさまざまな問題を抱えている。文学史観は私たちが中国古典文学に対する際の基盤となっているものであり、私たちが扱って立つところのそれを再検討しようとすることは、私たち自身の足下を突き崩すことに繋がる。中国古典文学の意義を探っていくためには、自分の根拠に揺さぶりをかけるこうした試みが求められるだろう。

引用が少し長くなったが、川合氏の意見は、文学史そのものの存在意義を新たに問い直すことの必要性和、仮に文学史に存在意義があるとすれば、その編纂方法は旧套を捨て去って新たな基軸を開拓すべきであることを我々に訴えかけているように思われる。これに関連して、最後に一言、私見を述べておきたい。

五 章培恒・駱玉明主編『中国文学史新著』の意義

中国の内外ですでに広く知られているように、章培恒・駱玉明両氏の主編に係る『中国文学史新著』（上中下、三冊）が、度重なる改訂を経て、2011年に復旦大学出版社から刊行された。

中国国内に於ける反響は大きく、2011年5月には、上海の復旦大学に於いて刊行を記念する国際学会が開催され、中国のメディアも一斉に報道した。主編者である章培恒氏は、かつて日本の神戸大学に於いて交換教授として教鞭を執られたこともあり、私もその講筵の末席を汚したことがある。長期にわたって復旦大学古籍整理研究所の初代所長をつとめられたが、2011年6月7日、惜しくも逝去された。章培恒氏の学問については、既に多くの学者が言及しており、今年に入って更に『不京不海集』（復旦大学出版社、2012年）が上梓されたことにより、その全体像が徐々に浮かび上がりつつあるので、贅言を費やす必要はないであろう。ここでは専ら、氏のライフワークとも言える『中国文学史新著』に限って、その特徴を紹介し、文学史の区分法に関する新たな認識の出現を慶賀したい。

章培恒氏の『中国文学史新著』は、旧来の文学史編纂の基準を抜本的に見直し、人間性の発展こそが文学を発展させる原動力であるとする新たな視点を打ち出したところに最大の特徴がある。従来の文学史が延々と墨守してきたところの、王朝の変遷と文学の発展とを連動させて記述するという方法を改めた画期的な文学史である。そこでは、古代から現代に至るまでのすべての作品が、人間性の発展という新たな基準によって見直され、再評価されている。その結果、従来の文学史が優れた文学であるとして称賛してきた作品も、そこでは必ずしも良好な評価を与えられず、中には、評価が逆転してしまったものさえ存在する。また、新たな基準を設定したことによって、従来顧みられることのなかった作品にも、改めて光があてられ、輝き始めている。

このように、『中国文学史新著』は既述の川合康三氏の問題提起に対する一つの有力な回答を提供したものとなっている。ただし、章培恒氏の手になる「原序」によれば、最初からそうした編纂基準が明確に意識されていたわけではなく、版を重ねる過程で、とくに北京大学の孫明君氏の批判を受けて再考を迫られ、思考錯誤の結果、新たな基準を打ち立てることにつながったことがわかる。つまり、『中国文学史新著』でさえも、その出発点に於いては、にわかに旧套を脱することができず、相変わらず前人の作りあげた枠組みの中でさまよっていたことになる。しかし、章培恒氏の果敢な決断の下に、該書は苦悶の末に「人間性の発展」という新たな基軸を見つけ出し、それに沿って文学史全般が再検討されることにつながった。もちろん、こうした基準も永遠に不変のものであるかどうかは、にわかに断言できない。今後また新たな指針が発見され、それに基づいた再検討がなされる日が訪れるのかも知れない。しかし、少なくとも、現時点に於いては、従来の枠組みを根本的に見直した文学史の著作は出現しておらず、非常に重要な成果であることは間違いないものと思われる。

日本で刊行された中国文学史 一覧

【明治期】

- 1 (15) 1882.9『支那古文学略史』末松謙澄(東京 文学社)
- 2 (25) 1892.2『支那文学史』兒島献吉郎(同文社『支那文学』に連載)
- 3 (27) 1894.5?『文学小史』兒島献吉郎(漢文書院『支那学』に連載)
- 4 (28) 1895~(30) 1897?『支那文学史』藤田豊八(東京専門学校講義録)
- 5 (30) 1897.5『支那文学史稿 先秦文学』藤田豊八(東京 東華堂)
- 6 (30) 1897.5『支那文学史 完』古城貞吉(東京 経済雑誌社)
- 7 (30) 1897~(38) 1904『支那文学大綱』笹川臨風・白河鯉洋・大町桂月・藤田劍嶺・田岡嶺雲(東京 大日本図書株式会社)
- 8 (30) 1897.6『支那小説戯曲小史』笹川種郎(東京 東華堂)
- 9 (31) 1898.8『支那文学史』笹川種郎(東京 富山房)
- 10 (32) 1899~(39) 1905?『支那文学史』高瀬武次郎(哲学館)
- 11 (33) 1900.9『支那文学史要 全』中根淑(東京 金港堂)
- 12 (35) 1902.12『支那文学史』(訂正再版)古城貞吉(東京 勸学会蔵版 富山房)
- 13 (36) 1903.11『支那文学史』久保天随(人文社)
- 14 (37) 1904『支那文学史』久保天随(早稲田大学講義録)
- 15 (40) 1907『支那文学史(上)』久保得二(早稲田大学出版部蔵版)
- 16 (42) 1909.3『支那大文学史古代篇』兒島献吉郎(東京 富山房)
- 17 (43) 1910『支那文学史(下)』久保得二(早稲田大学出版部蔵版)
- 18 (45) 1912.7『支那文学史綱』兒島献吉郎(東京 富山房)
- 19 刊行年不明『支那文学史談』松平康國(早稲田大学出版部蔵版)
- 20 刊行年不明『支那近世文学史』宮崎繁吉(早稲田大学出版部蔵版)

【大正期】

- 21 (8) 1919.5『支那文学概論講話』塩谷温(大日本雄弁会)
- 22 (9) 1920.2『支那文学考・第一篇散文考』兒島献吉郎(目黒書店)
- 23 (11) 1922.9『支那文学考・第二篇韻文考』兒島献吉郎(目黒書店)
- 24 刊行年不明『支那文学史』兒島献吉郎(早稲田大学出版部)
- 25 (14) 1925.11『支那文学研究』鈴木虎雄(弘文堂書房)

26 (14) 1925.12 『支那小説戯曲史概説』 宮原民平 (共立社)

【昭和(戦前)期】

- 27 (2) 1927.10 『文検参考支那文学史要』 橘文七 (啓文社出版)
- 28 (3) 1928.3 『支那文学概論』 兒島献吉郎 (東京 京文社)
- 29 (3) 1928.11 『支那文学史概説』 西沢道寛 (同文社)
- 30 (5) 1930.5 『支那文学思想史』 渡辺秀方・近藤潤治郎 (明善社)
- 31 (6) 1931.7 『文部省検定受検参考支那文学史要』 小林甚之助 (大同館書店)
- 32 (7) 1932.2 『支那文学史綱要』 内田泉之助・長澤規矩也 (文求堂書店)
- 33 (7) 1932.10 『新講支那文学史』 水野平次 (東洋図書株式合資会社)
- 34 (8) 1933.6 『文検参考問題解説支那文学史・哲学史』 松崎末義 (啓文社書店)
- 35 (10) 1935 『支那文学概説』 青木正兒 (弘文堂書房)
- 36 (14) 1939.4 『支那文学史綱要 新訂版』 内田泉之助・長澤規矩也 (文求堂書店)
- 37 (17) 1942.10 『表解支那文学史要・表解支那哲学史要』 岡田稔・鄭嘉昌 (東文堂書店)
- 38 (18) 1943 『支那文学思想史』 青木正兒 (岩波書店)

【昭和(戦後)期】

- 39 (21) 1946.6 『支那文学概論・上篇』 塩谷温 (弘道館)
- 40 (22) 1947.8 『支那文学概論・下篇』 塩谷温 (弘道館)
- 41 (22) 1947.10 『支那文学概論』 (限定版) 塩谷温 (弘道館)
- 42 (22) 1947.2 『支那文学概論』 塩谷温 (弘道館)
- 43 (27) 1952.3 『中国文学小史』 足立原八束 (昌平堂)
- 44 (30) 1955.4 『中国文学史上』 大矢根文次郎 (前野書店)
- 45 (31) 1956.7 『中国文学史』 内田泉之助 (明治書院)
- 46 (31) 1956.10 『中国文学史』 倉石武四郎 (中央公論社)
- 47 (32) 1957.6 『中国文学史の問題点』 竹田復・倉石武四郎 (中央公論社)
- 48 (42) 1967.7 『中国文学史研究～「文学革命」と前夜の人々～』 増田渉 (岩波書店)
- 49 (43) 1968.1 『中国文化叢書 5 文学史』 鈴木修次・高木正一・前野直彬 (大修館書店)
- 50 (45) 1970.6 『支那文学史～上古より六朝まで』 狩野直喜 (みずさ書房)
- 51 (46) 1971.4 『中国文学史』 佐藤一郎 (慶応通信)
- 52 (49) 1974.3 『中国文学史研究 小説戯曲論考』 波多野太郎 (桜楓社)

- 53 (49) 1974.10 『中国文学史』 吉川幸次郎・黒川洋一 (岩波書店)
- 54 (50) 1975.6 『中国文学史』 前野直彬 (東京大学出版会)
- 55 (57) 1982.4 『中国文学史』 清水潔 (仏教大学通信教育部)
- 56 (58) 1983.2 『中国文化全書 6 中国文学史上～近世 (後期)・現代』 佐藤一郎 (高文堂出版社)
- 57 (60) 1985.2 『中国文化全書 5 中国文学史上～古代・中世・近世 (前期)～』 莊司格一・小川陽一・芦立一郎・植木久行 (高文堂出版社)
- 58 (60) 1985.3 『中国文学史 改訂版』 佐藤一郎 (慶応義塾大学出版会)

【平成期】

- 59 (5) 1993.2 『中国文芸史』 安藤信広 (法政大学通信教育部)
- 60 (8) 1996.10 『不平の中国文学史』 大木康 (筑摩書房)
- 61 (9) 1997.7 『新しい中国文学史～近世から現代まで～』 藤井省三・大木康 (ミネルヴァ書房)

(川合康三編 『中国の文学史観』「資料篇」, 創文社, 2002による)